

人間は一個の身体として、あるいは生命体として存在している。アイデンティティーを他者性との関係で捉えるとき、この身体という次元を無視することはできないだろう。あたりまえの話だが、僕らは自己の外部から酸素や水分、栄養などを絶えず摂取しなければ生きられない存在である。身体ないし生命としての「私」を維持するために、いつも外部から「他者」を取り込まなければならぬ、という逆説。だが、そのように他者を取り込むことは、同時に自己が絶えず他者化されることでもある。毒ガスや毒物という致命的な「他者」を摂取して、文字どおり身体が破壊されてしまうのは、そのような他者化の極端な例である（宗教的に厳格な人々がその戒律にのっとりつつある種の食材を忌避する際にも、自らがまさしく肉体レベルで「他者化」されることへの恐怖があるに違いない）。僕らは一つの身体的存在として、そのような他者の同化および他者への同化という一見奇妙な事態を、日々生きているのだ。あるいは、僕らはそういう身体的存在として、自らの内部を未知の不確定な「外部」へと常にすでに開いてしまっているのである。

さらに、身体ないし生命という契機が「アイデンティティー／他者性」という問題にとつて重要だと思えるのは、それが僕らの存在につきまとう、ある「受動性」を特徴的に示していると思えるからである。

詩人・吉野弘の作品に『I was born』というよく知られた印象的な散文詩がある。「英語を習い始めて間もない頃」の「少年」とその「父」の対話を軸にした作品である。ある夏の夕方、少年は父といっしょにどこかの寺の境内を歩いている。すると、向こうから妊婦がゆつくりと歩いてくる。少年は思わずその妊婦の腹に視線をとどめ、そこにうずくまっている胎児のことを想像し、やがてその胎児が生まれ出てくる不思議さに打たれる。そのとき少年は、生まれるということがまさしく「受け身」である理由をふと了解する。少年は興奮して父に話しかける。

——やっぱり I was born なんだね——

父は怪訝そうに僕の顔をのぞきこんだ。僕は繰り返した。

——I was born yo。受身形だよ。正しく言うと人間は生まれさせられるんだ。自分の意志ではないんだね——

この少年の「発見」には、僕らもよく思い当たる節があるだろう。この発見の延長で、「産んでくれと頼んだ覚えはない。」と理不尽に言い募って親を困らせたことが、誰にも一度くらいはあるのではないだろうか。しかし、父はこの「少年」である息子に対して、思いがけないことに、「蜚蜚」の話をゆつくりと語って聞かせる。

——蜚蜚という虫はね。生まれてから二、三日で死ぬんだそうだが それなら一体何の為に世の中へ出てくるのかと そんな事がひどく気になった頃があつてね——

僕は父を見た。父は続けた。

——友人にその話をしたら 或日 これが蜚蜚の雌だといって拡大鏡で見せてくれた。説明によると 口は全く退化して食物を摂るに適さない。胃の腑を開いても 入っているのは空気がかり。見ると その通りなんだ。ところが 卵だけは腹の中にぎっしり充滿していて ほっそりした胸の方にまで及んでいる。それはまるで 目まぐるしく繰り返される生き死にの悲しみが 咽喉もとまで こみあげているように見えるのだ。つめたい光の粒々だったね。

この作品の後半にはさらに、少年の母が当の少年を「生み落として」すぐに死んだという話まで繰り返されているのだが、最後は「——ほっそりした母の 胸の方まで 息苦しくふさいでいた白い僕の肉体——。」というイメージが少年の脳裏にくっきりと焼きつけられるところで、この散文詩は結ばれている。

身体や生命を思うとき、僕の頭にはいつもこの詩のことが思い浮かぶ。まずはもちろん、子供が母親の胎内で母親の生命まで圧迫して育ってしまうという側面を、この作品が、蜚蜚のほっそりとした身体にびっしり詰まった卵という鮮烈なイメージで、あらためて喚起してくれるという点がある。実際、生まれてほしくない子供がぐんぐん育ってしまう

というモチーフは『ファウスト』第一部のグレートヒエンの悲話をはじめ、昔から文学の格好のテーマとなってきたのだ。母親が怪しげな薬を飲んでも、踏み台から繰り返し飛び降りても、執拗に胎内にとどまって、ひたすら母胎からカルシウムを貪り続ける胎児。そして、生まれてしまったあとには、どんなに捨て去ろうとしても、泣き叫んで庇護を求めてやまない赤子——。いくらか儒教的な「修身」のように聞こえるかもしれないが、そういう自分の発生段階のあり方まで、どこかで僕らは引き受けなければならぬ、と僕は思う。その意味において、生まれ落ちた者はおしなべて、男であれ、女であれ、「母」に対する少なくとも潜在的な「加害者」なのである。

しかし、そういう次元を超えて、僕にはこの作品における「母」のイメージが、実はそのまま自分自身の生命のイメージとしても浮かんでくるのである。単に子を宿した母親がそうというのではなく、僕ら自身がそれぞれ、いわば生命という卵を「咽喉もとまでこみあげ」させているのではないだろうか。だがそれは必ずしも、仏教の法話でよく言われるような、「生きさせていたでいてる。」というありがたいイメージではない。むしろ、自分では制御できない生命が、ほとんど自分自身の身体を圧迫するようにして僕らのうちに充填されているのではないか、ということだ。僕が「身体」という契機、あるいは正確には身体と意識との関係という契機のうちに「受動性」を見ておきたいのは、何よりもこのような意味においてである。しかも、そのような「身体」を離れては、僕らはそもそも存在しえないのである。

それにしても、自分自身の生命（身体）を同じ生命（卵）が圧迫している——これはとても奇妙な言い方に聞こえるかもしれない。しかし、後者の生命を欲望とか無意識と言いかえてみるならば、それなりに了解できる事態ではないだろうか。例えば、意識的にはもう死んでしまいたいと思っても、次の瞬間には空腹に襲われたり、排泄の欲求に駆り立てられたりする、それがほとんど滑稽とも思える僕らのあり方の一面である。あるいは自殺とまでは言わないまでも、本来自分が没入すべき事柄が別にあるときに、しばしば僕らの身体感覚はそれをみごとに裏切ってみせるだろう（こぞという肝心なときに限って、トイレに行きたくなったりする）。

そんな場合の欲望や無意識は、僕らにとつて限りなく「他者」の相貌を帯びているに違いない。その点を考えてみれば、僕らは、そもそも「欲望」や「無意識」というのは、僕らにとつて「自己」なのだろうか「他者」なのだろうか、という素朴な疑問に突き当たるはずだ。実際この問いもまた、決定不能としか答えようがないのではないだろうか——日常的には僕らはこれを都合よく使い分けて、ある場合には「欲望」のうちに相手の固有の存在を認めたり（「あいつの欲望は結局こうだ。」）、また逆に自己疎外を認めたり（「あいつは欲望に突き動かされている。」）しているにしても。